

氏 名	宮 津 寿 美 香
学 位 の 種 類	博士（学術）
学位記の番号	甲第182号
学位授与年月日	2015（平成27）年3月20日
学位授与の条件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	前言語期のコミュニケーション行動の発達 ー「目さし」から「指さし行動」へー
論文審査委員	主査 川上清子（人間発達学専攻 教授） 副査 川端有子（人間発達学専攻 教授） 副査 坪能由紀子（人間発達学専攻 教授） 副査 繁多 進（白百合大学名誉教授）

論 文 の 内 容 の 要 旨

前言語期において、子どもはいかに他者とコミュニケーションをとっているのか。近年の発達研究において乳幼児のもつ能力が明らかとなってきた。特に、生後9か月頃からみられる「指さし行動」は、前言語期のコミュニケーション行動の中でも中心的な行動として注目をされている。指さし行動は、主に言語発達との関係で注目をされており、子どもが指さした対象について大人が声かけをすることで子どもは自ずと言葉を覚える。このように、指さし行動は大人と子どもとの関係で述べられることが多く、これまでも大人のもつ役割については多くの研究がなされてきた。しかし、指さし行動の発生や指さし行動を行う相手など、いまだに詳細に解明されていない点や課題は残る。また、指さし行動は前言語期のコミュニケーションの指標であるが、子どもが指さし行動をする前から指さし行動に付随するような行動を示しているとの指摘もなされている。本論文では、フィールドを「保育場面」（第1部）と「家庭場面」（第2部）とし、前言語期のコミュニケーション行動の発達について縦断的観察を通して検討した。構成は、序章、第1部（第1章、第2章）、第2部（第3章、第4章）、終章からなる。

序章：前言語期のコミュニケーションの研究の概観、問題点と課題、本研究の目的

第1部：「保育場面」における縦断的研究

第1章：1歳児の指さし行動の様相 ー「子ども同士の指さし行動」と「保育士への指さし行動」ー

第2章：0歳児の指さし行動の様相ー「一人指さし行動」から「伝達的指さし行動」へー

第2部：「家庭場面」における縦断的研究

第3章：2組の母子における前言語期の縦断的研究

ー母親の注意を喚起する子どもの視線に焦点をあててー

第4章：「目さし」の内容と個人差 ー6組の母子の「目さし期」における相互作用からー

終章：本論文の総括と意義、今後の課題

第1部 第1章では、保育場面における1歳児の4名の対象児（男児1名、女児3名：開始時最年少1歳7か月～終了時最年長2歳6か月）の指さし行動について分析した。対象児の指さし行動は、その質の違いから8カテゴリー（a.注意喚起、b.場所・方向、c.命名、d.要求、e.質問、f.説明、g.模倣、h.その他）に分類することが可能であった。ここでは、子どもの言語発達と共に指さし行動がなくなるのではないこと、「子ども同士の指さし行動」が「保育士への指さし行動」よりも多いことがわ

かった。また、カテゴリーの割合をみると、「保育士への指さし行動」では「d. 要求」や「e. 質問」など、何らかの言語的なフィードバックを必要としている指さし行動が高いが、「子ども同士の指さし行動」では、相手の指さし行動を模倣し、その後何度も互いに模倣し合うなど遊びの要素が強いことがわかった。

第1部 第2章では、0歳児の指さし行動に注目をした。対象児は0歳代の9名(男児5名、女児4名：開始時最年少9か月～終了時最年長2歳1か月)である。指さし行動には、コミュニケーション機能が付随していることが特徴だが、対象児の行う指さし行動には「自分自身のために行う」ような「ひとりごと」のような指さし行動がみられ、そのような指さし行動を第2章では「一人指さし行動」と定義した。大きく以下の3つの視点(目録、身体発達の発達、言語発達との関係)から検討をした。その結果、いずれの場合においても「一人指さし行動」とコミュニケーション機能をもつ「伝達指さし」の頻度に違いがみられた。また、「一人指さし行動」を質の違いから4カテゴリー(ア.状態、イ.目的、ウ.理解/命名、エ.その他)に分類したところ、1歳半頃までは、自分の目的や欲求物について指さす「イ.目的」の割合が高かったが、それ以降では、人の動きや状態を指さす「ア.状態」の割合が高いことがわかった。これらの結果から、対象児の関心が自分自身から環境内の他者やものへと変化していく様子が窺われた。

第2部 第3章では、指さし行動を行う前の子どものコミュニケーション行動に注目することを目的とした。家庭場面での縦断的研究を乳児期初期からおこない、特に子どもの「視線」に注目をした。母親の注意を喚起する子どもの視線を「目さし」と定義し、前言語期における子どもの発達に伴う「目さし」の変化について検討した。対象児は、2組の母子(女児1名、男児1名)であり、乳児期初期から2歳を過ぎるまで縦断的に観察した。その結果、「指さし期」であっても「目さし」は出現するが、「一語文期」になると前者では「目さし」はかなり出現したものの、後者では見られなくなり、「二語文」の出現により、「目さし」は両者ともほぼ出現しなくなることが分かった。また、対象児の視線や指さし行動に対する母親の反応で多かった「声かけ」について、その内容に含まれる「名詞」の割合を算出した。その結果、「目さし」と「指さし行動」に含まれる名詞の割合がいずれも半数を超えていた。このことから、指さし行動に対する母親の声かけの機能(言語を獲得させるため)と「目さし」の機能が質的に近いのではないかという可能性も示唆された。

第2部 第4章では、第3章の縦断的观察で明らかとなった「目さし」について、更に対象を増やし(第3章の2名を含む、計6組)、その個人差や質的な違いについて検討した。乳児期初期において、6組の対象児すべてに「目さし」がみられ、対象児の中で一番若い117日齢の乳児に対しても「目さし」がみられた。対象児の注視対象について分析をすると、対象児に共通して「玩具・食器」をみている時に最も母親の注意を喚起しやすく、対象児の比較的身近にあるものに対して母親は反応を示しやすいことがみてとれた。また、第3章で明らかとなったもう一つの点として、「目さし期」に母親がイニシエータの指さし行動がみられたことであったが、本章の他の対象児にもみられるのか検討したところ、全ての母親にみられた。このように、子どもに指さし行動がみられる前から、母親は子どもの視線に注目してその意図を読み取ろうとしており、またこの時期に母親自身も指さし行動を用いながら子どもとかわっていることがわかった。

終章では、これらの一連の研究から明らかとなったこと、研究の意義と課題について述べた。前言語期において子ども及び周囲の大人は、乳児期初期から互いにかかわりを持ち、発達過程に見合ったコミュニケーション行動を用いていることがわかった。またそれらの行動の一つ一つが基盤となり、子どもの発達を支え、促進していることを研究から示すことができたと考えられる。

論文審査結果の要旨

本論は、ことばを話す前の子どもたちのコミュニケーションの様相から、言語獲得の過程を探

ろうと試みたものである。

前言語期において、子どもはいかに他者とコミュニケーションをとっているのか。特に、生後9か月頃からみられる「指さし行動」は、前言語期のコミュニケーション行動の中でも中心的な行動として位置づけられている。指さし行動は、主に言語発達との関係で注目をされており、子どもが指さした対象について大人が声かけをすることで子どもは自ずとことばを覚える。このように、指さし行動は大人と子どもとの関係で述べられることが多く、これまでも大人のもつ役割については多くの研究がなされてきた。

しかしながら本論では、子ども同士の指さしもたくさん観察されること、また指さし行動が出現する前に、子どもの視線に対して他者が反応する「目さし」という現象が頻発することを長期間に亘る縦断的観察を通して見出した。

本論文の構成は以下のとおりである。

序章

第1部 保育場面における縦断的研究

第1章 1歳児の指さし行動の様相

—「子ども同士の指さし行動」と「保育士への指さし行動」—

第2章 0歳児の指さし行動の様相

—「一人指さし行動」から「伝達的指さし行動」へ—

第2部 家庭場面における縦断的研究

第3章 2組の母子における前言語期の縦断的研究

—母親の注意を喚起する子どもの視線に焦点をあてて—

第4章 目さしの内容と個人差

—6組の母子の「目さし期」における相互作用から—

終章

序章では、前言語期のコミュニケーションの研究の概観、問題点と課題、本研究の目的を述べている。

第1部 第1章では、保育園において、4名の1歳児(男児1名、女児3名：開始時最年少1歳7か月～終了時最年長2歳6か月)の指さし行動について観察した。6ヶ月に亘り55日間フィールドに通い、その内4名全員が出席であった42日分(1日平均約3時間半)を分析対象としている。機器類は使用せず、参与観察によるフィールドノートの記録を分析した。対象児の指さし行動は、その質の違いから8カテゴリー(a.注意喚起、b.場所・方向、c.命名、d.要求、e.質問、f.説明、g.模倣、h.その他)に分類することが可能であった。ここでは、子どもの言語発達と共に指さし行動がなくなるのではないこと、「子ども同士の指さし行動」が「保育士への指さし行動」よりも多いことを示すことができた。また、カテゴリーの割合をみると、「保育士への指さし行動」では「d.要求」や「e.質問」など、何らかの言語的なフィードバックを必要としている指さし行動が高いが、「子ども同士の指さし行動」では、相手の指さし行動を模倣し、その後何度も互いに模倣し合うなど遊びの要素が強いことがわかった。

第1部 第2章では、第1章とは異なる保育園において、0歳児の指さし行動に注目して観察を行った。対象児は9名(男児5名、女児4名：開始時最年少9か月～終了時最年長2歳1か月)で、約1年間に亘り22日間(1日約60分)、ビデオで撮影した記録を分析した。指さし行動には、コミュニケーション機能が付随していることが特徴だが、対象児の行う指さし行動には、自分自身のために行う「ひとりごと」のような指さし行動がみられ、そのような指さし行動を「一人指さし行動」と定義した。大きく以下の3つの視点(日齢、身体発達、言語発達との関係)から検討した。その結果、日齢では547日(1歳半)、身体発達では歩行、言語発達の場合は有意味語の出現を境に、「一人指さし行動」よりコミュニケーション機能をもつ「伝達的指さし」の頻

度が多くなることがわかった。また、「一人指さし行動」を質の違いから4カテゴリー(ア.状態、イ.目的、ウ.理解/命名、エ.その他)に分類したところ、1歳半頃までは、自分の目的や欲求物について指さす「イ.目的」の割合が高かったが、それ以降では人の動きや状態を指さす「ア.状態」の割合が高いという結果となった。これらの結果から、対象児の関心が自分自身や身近なことから、環境内の他者やものへとの変化していく様子が窺われた。

第2部第3章では、指さし行動を行う前の子どものコミュニケーション行動に注目することを目的とした。家庭場面で、特に子どもの「視線」に注目して、ビデオカメラで記録した。子どもの視線の内、他者の注意を喚起し、何らかの反応を引き起こしたものを「目さし」と定義し、前言語期における子どもの発達に伴う「目さし」の変化について検討した。対象児は、2組の母子(女児1名、男児1名)であり、2歳を過ぎるまでそれぞれ1年半以上に亘り縦断的に観察した。その結果、「指さし期」になっても「目さし」は出現するが、「一語文期」になると前者では「目さし」はかなり出現したものの、後者では見られなくなり、「二語文」の出現により、「目さし」は両者ともほぼ出現しなくなることがわかった。また、対象児の視線や指さし行動に対する母親の反応で多かった「声かけ」について、その内容に含まれる「名詞」の割合を算出した結果、「目さし」と「指さし行動」に含まれる名詞の割合がいずれも半数を超えていた。このことから、指さし行動に対する母親の声かけの機能(言語を獲得させるため)と「目さし」の機能が質的に近いのではないかという可能性も示唆された。

第2部第4章では、第3章の縦断的观察で明らかとなった「目さし」について、更に対象を増やし(第3章の2名を含む、計6組)、その個人差や質的な違いについて、家庭においてビデオカメラで撮影されたものにより検討した。乳児期初期において、6組の対象児すべてに「目さし」がみられ、対象児の中で一番若い117日齢の乳児においても「目さし」が観察された。対象児の注視対象について分析をすると、対象児に共通して「玩具・食器」をみている時に最も母親の注意を喚起しやすく、対象児の比較的身近にあるものに対して母親は反応を示しやすいことがみてとれた。また、子どもが指さし行動を示す前のこの時期に、全ての母親において母親がイニシエータの指さし行動が見られた。このように、子どもに指さし行動がみられる前から、母親は子どもの視線に注目してその意図を読み取ろうとしており、またこの時期に母親自身も指さし行動を用いながら子どもとかかわっていることがわかった。

終章では、これらの一連の研究から明らかとなったこと、研究の意義と今後の課題について述べた。前言語期において子ども及び周囲の大人は、乳児期初期から互いにかかわりをもち、発達過程に見合ったコミュニケーション行動を用いていることがわかった。またそれらの行動の一つ一つが基盤となり、子どもの発達を支え、促進していることを研究から示すことができたと考える。

本論文で明らかになった点およびその意義は、以下のとおりである。

先ず、第1部の保育園での観察からは以下のような新しい知見を示すことができたと考える。これまで指さし行動は言語を獲得するための前言語期の重要なコミュニケーション手段であると考えられてきており、子どもが指さしたもの(こと)に、おとなが応答することにより言語が発達するという視点での研究が主であった。これに対して本論では、子ども同士の指さし行動も頻発すること、そしてそれらはおとなに対するものと性質・目的が異なるものも多く見受けられることを示すことができた。また、観察の月齢をこれまでの先行研究より下げることによって、他者に向けての指さし行動を行う前に、自分自身のために行う「ひとりごと」のような指さし行動が見られ、それは約1年間に亘る縦断的研究により、生後1歳半前後がその変換点であることも見出した。これは身体的には一人歩きができる時期、言語的には有意味語の出現する時期に当たり、認知発達の面からは自己認識がほぼ確立され、乳児が他者への全面的依存から独立して幼児へと発達していく大切な時期でもある。

第 2 部の家庭における観察からは、「目さし」という先行研究ではほとんど触れられてこなかった視点を呈示することができた。現在では視覚の発達 は胎児期からすでに始まっていることは周知のことであり、胎児・新生児の視覚に関する研究は数限りなく行なわれてきている。しかしながら発達初期の視覚を用いたコミュニケーションの研究は見当たらない。人間は目覚めていれば何か（どこか）には視線を向けている。本論で取り上げた「目さし」は、「指さし行動」とは異なり、乳児のまわりにいる他者も無意識に行っているものではないかと思われるが、乳児の視線の先に対して他者が反応するという行為に着目し、その意味を発達 的視点から考察した意味は大きいと考える。

一連の研究を通して、乳児のコミュニケーション行動の基礎となるものが、「指さし行動」以前にある可能性を探り当てたこと、また「指さし行動」に関しても、その機能の多様性を示したことは、今後の発達研究に新たな展開を及ぼすものと期待できる。

以上により審査委員会は、本論文が保育園と家庭という異なるフィールドにおいて長期間に亘る縦断 的観察を行い、前言語期のコミュニケーション行動の発達に関して新しい知見を呈示・考察し得たという点を高く評価し、博士（学術）の授与に値すると判断した。